

依頼信言平貞道切人頭語 25-10<よりのぶの ことによりて たひらのさだみち ひとのかしらを きること
>

◎今昔物語の中にもチャンバラがある、義理や人情の末、「えい やあー」と切りあって殺すという劇画もあるものだと感じる。人がいる以上、好きだ嫌いだ、気に入った気に入らない、仲よくしよういや許せない、こんな普通の感情は古代も現代も変わるまい。ここに出てくる主人公は貴族ではないがそれでも高級人種、けっして庶民の貧乏人ではない。貴族の時代が終わろうとしている、家来だった武闘集団が頭をもたげてきている、そんな時代を感じる。

◎射殺したというのが、刀でバツサリではないようで弓でにつくき奴をやっつけている。まだ戦国時代に入っていないが首を切ってそれを持ち帰るとは、この時代でもぼちぼち戦国時代の風習が出始めていたのかな。窃盗、喧嘩、殺人、という犯罪がありその罰則があったはずだけれど高級人種には適用されていなかったのか。朝臣（これは名前らしい）の家来の侍が、「あいつを殺してこい」と主人すじより頼まれ、家来を連れて東国へ行く。相手の男も家来を連れての道中、追いかけて射殺し、首を切ってその首を持ち帰り、主人すじより礼を言われ褒美をもらう。生首を東国から京に持ち帰っている。

◎今は昔、源頼光朝臣の家に多くの客が集まって酒宴をしていたが、その中に弟の頼信朝臣も来ていた。ところで、頼信朝臣の郎党で平貞道という武士がいた。この日、貞道が徳利を手に席に出てきたところ、頼信朝臣は来客たちも聞いているのに、貞道を大声で呼び寄せて、「駿河国にいる ○○という奴は この頼信に無礼をはたらきおった そいつのそっ首をとってまいれ」という。貞道はそれを聞き、「オレは今 頼光様にお仕えしているこのかたは弟御でおいでだから たしかの御一門の主人に違いないが まだ直々にお仕えしたことがない そのうえ このようなことはご自身の腹心の者にこそ命ずべきである 一步譲って オレがこの頼光様にお仕えしているので そのよしみで仰せつけられるのであれば 人のいない所に呼んで そっと仰せになればいいものを さにあらで この満座の中で 人の首を取るといような大事を大声で仰せられるとは何事であるか あきれたことを言われる人だわい」と思ったものだから、はっきりした返事もせず、その場はすませてしまった。

◎その後、三四ヶ月ほど過ぎ、用があつて貞道は東国に出かけた。あの頼信朝臣が命じたことは、その時すでにつまらぬことだと思ったので、思い出しもせず、全く忘れていた。ところが、貞道は道中、頼信朝臣が殺せと命じた当の男とばったりであった。双方馬を止めてのんびりと話などして、さて左右に分かれようとした。ところで、その男は頼信が貞道に言いつけられたことをすでに聞いていた。さてそれはこっそりではなく、満座の中で言ったことなので、自然、この男の耳に入ったのだ。そこで、別れ際に、男が、「これこれのことは ご貴殿 承知されましたのか」と尋ねた。そういわれて初めて貞道は思い出し、「なるほど そういうことがあった わしは兄上の殿には お仕えいたしますが まだかの信頼の殿にはお仕えしたことがありません その上 満座の聞く中でゆえなくそのようなことを仰せられたので おかしなことよと思い そのままにしておきました あんなことを思いつく人がいますか おかしなことですわ」と言って笑うと、この男は、「京から人がさように告げてきましたので ほんとうに討手をおかけになるおつもりかと思ひまして 実は今日なども胸がドキドキしていたのです ご貴殿が下らぬこと思われたとはまことによいご思案です 心よりお礼申し上げます だが たとえかの殿の 仰せを背きがたく思われたところで 拙者ほどの腕利きを そうやすやすと討ち果たすことはおできになれようはずもありません」とほほえんで笑う。

◎これを聞いた貞道は、「素直に 喜び これですと安心」とだけ言えばいいものを、「おれは 腕利きだ おれを殺せるもんか」なんてえらそうなことをいうもんだから、「それならば 本当に 首を取ってやろう」と思い立った。

◎貞道は、郎等共に考えをもらし、馬の腹帯を締め直し、胡籥（やなぐい：矢を入れる）などを整えてとって返し、あとを追った。岬が次つぎと湾をへだてて続いているところを追いかけているうち、やがて追いついた。茂った林のあたりを歩き過ぎさせ、いくらか広い野に出ると同時に喚声をあげてうちかかると、「そんなことだと

おもっていたわ」と言って、馬首をめぐらしたが、この馬鹿者は、貞道が討ち果たすつもりはないと言ったことを真に受けていたのだろうか、乗り換えの馬に乗り油断して歩いていたので、ひと矢も射返せず、真っ逆さまに射落とされてしまった。

055 北小松 130725

- ◎7:50 北小松駅を出発、調べるとほぼひと月前にもここに、ひと月前と同じ時間の電車に乗ってやって来た。前回は週日だった、オレひとりで来た、駅に降り立ったのはオレひとり、一日の山行で人にも熊にも会わなかった。え、熊、と言われるがその数日前に大普賢岳を登った人が、「熊の唸り声を聞いた」と知らせてくれたので、「これはくわばら」と大きい鈴を持って出かけた。山行の間中鈴を鳴らし笛を吹いていたのを思い出す。今回は、ヤヒロ、ノンちゃんのお二人と同行、しかも日曜日なので幸いにも幾人かが山に入っていた。
- ◎林道を登りながら、虫の話、「今年は セミの声を聞かない」「そういや ウツコでも 毎年 喧しいぐらいに 鳴っていた 跳びあがっていた 抜け殻が いっぱいあった」「地球温暖化 この暑さで セミが 絶滅したのかな」そんな話をしながら自然がいっぱいの舗装道路の横から、か細くセミの鳴く声が聞こえた。
- ◎ネット氏の意見では、2025 年はまったく蝉の鳴き声がしないと公の機関からの報告がある。早い梅雨明け、日々の高温が原因らしいとおっしゃる。食物連鎖からは、セミを捕食するヒヨドリやカラスが困っているらしい。何年も地中生活をする蝉のイモムシも土を耕す役目があるらしい。昆虫の一種がいなくなるということは異常現象である、オレもそう思う。
- ◎9:10 涼峠。体調はいいようで苦も無く歩ける。この暑さの先週、イン谷口から武奈ヶ岳に行ったが、その時は体がだるくコヤマノ岳から引き返した。これは前の日の寝不足、「体調が悪いね」と思いながら登り始め、最後まで足が進まなかった。「今日も この暑さでは だめかな」という危惧もそっちのけで健脚に過ごせた、一か月前と同じようにスイスイ歩けた。昨夜はよく眠れた、睡眠剤のおかげでぐっすり眠れたのが体調維持の原因なのかもね。
- ◎顔から汗がしたり落ちるが、手で拭うだけで、ハンカチを出すまでもない、今日は先週より涼しいのか、体調がいいので汗も少ないのか、ヤケまでの急登、木の枝を根を掴んで登っていく。「お ヤケに到着」と数人の人の声。京田辺の山岳会の人だそうで、オレより10歳や15歳ぐらい若いお姉さん方6.7人おられる。
- ◎涼峠で凍らせたゼリーを出そうとすると、「スイカが 先 さきに こっちを食べて」ヤヒロさんが大きくカットして冷えたスイカを差し出してくれた。「冷たい 美味しい あまい」最高である。凍ったゼリーはヤケで喰った。ほどよく融けだし、これまた冷たく美味しい、とスイカと合わせ二重奏でした。
- ◎今日は涼しいと何度も言っているが、袖なしのヘラヘラシャツを着てきた。1000円シャツを2枚買った、「ちと 恰好が悪いかも でもいいや」と着てきた、これが涼しい、やや涼しい風が胸や腹や背中を通り抜ける、「これからの夏は 小さい山は これに限るね」と自賛。「山では 長そでシャツに 長ズボン 肌を 出すと 怪我するよ」よく自分に言い聞かせたセリフだが、夏の長そでシャツでは熱中症寸前である。タイツに半ズボンもいいかもしれないね。今日も先週も、登りの途中で汗びっしょり、着替えがいるほどである。
- ◎ヤケオ山あたりの尾根道、エンヤコラ、は一は一言いながら登っていく。左側は切り立って崖崩れのような箇所がある。そんな空間を鶯の集会、10羽ぐらいがぐるぐる、時にはサーっと、時には止まったように、空に浮いている。こんな集団トビは初めて見た、なにの集会か、繁殖相手探しか、仲良しグループか、これだけ集まればカラスも怖くないよね。
- ◎先日九州旅行でお世話になった中村さんが、ホンジュラスに帰って、「緑が とげとげしい 日本と違う」とおっしゃる。夏本番の日本の1000Mぐらいの山、麓も山も葉が生い茂り、ギラギラ太陽が照りつけ、その影の部分、陽の当たる反対側の陰の部分、ギラギラがきつい分、黒さ暗さがこちらもきつい。プラスマイナスの差が大きい。歩きながら向こうの山肌を見ると黒っぽい緑の黒が対比している。ホンジュラスの緑を見ないとわからないが、赤道に近い分、陽の色も違うのだろうね、陽の色が違えば、それに照らされる何もかもが、迫力が、

凸凹が、温度差が、あるのかもしれない。

◎イワカガミの葉、緑の苔、そんな間から紅葉した葉っぱ、小さくヒョロヒョロ、これはキレイ。

◎12時に釈迦岳直下で昼飯、1時頃に釈迦岳を通過して、リフト道から下った。高度が500Mあたりになると、風もなく蒸し暑くなってきた。電車でお神酒をちといただき、5時に帰宅。

056 一日 150725

◎この話は半月前、7月初旬の話である。

今日は大変な一日だった。ジジイになると、一日ひとつの仕事しかこなせない、ふたつもあると焦ってしまう、しんどい、てな調子で用事はひとつにしている。

「え なにがあった」と聞かれ何をどういうふう順番に話せばいいのか、なんて考えながら指折り数えているオレである。午後1時半に市の方が来られる予約は半月前にあった。衣川さんから、「新車が来た 今2台並んでいる いつ取りに来る？」一昨日にメールがあった。「今の車 行き先は決まったが 日時がまだなので おって 連絡します ○○日には 車が要るので」行先の車屋さんと何度か電話連絡の末、今日の午後オレが運転して持って行くことになった。車屋さんが、「わざわざ 持ってきてもらえるなら 次の場所まで 送りますよ」と返事をいただいた。これで三つのことがいっぺんにこなせるぞとほくそ笑んだ。

1時半の来客と小1時間話した後、豊中市の庄内まで車を運び、車屋さんに衣川さんちまで送ってもらい、車をいただいて帰るというウルトラ綱渡りが成立した。みやげにエビスビールを買ってリュックに詰めた。リュックなら、ビールを詰めても少々の距離は歩けるもんね。

◎大変な一日の朝、普段通りに5時ころ目覚めた。寝る前に、「こらあかん 暑すぎる」と階下のクーラーの効いた部屋に12時過ぎに転がり込んだ。11時頃に眠剤を飲んだが熱くて寝付けず、クーラー部屋に入るとすぐにくろり寝たようだ。

いつものように時間をかけて歯を磨き、猫のために2枚の掃き出し窓を開け、風呂を点検、「あれれ 今日も水が ちょろり出ている」と洗濯物を洗濯機に運びスイッチを入れた。

ヤカンふたつに湯を沸かし、自分用のパンをカットしてトースターで焼く。日本茶と紅茶をつくる、パン焼き機にセットする、芋サラダを作る、大根と人参のなますを作る、こんな作業を交互にやっている。野菜たっぷりのサンドイッチをほうばるうちに、洗濯物が上がり庭に干す、週2回のゴミ出しもある。

◎朝、1・2度操作をしたと思うがスマホ君、「PINを入れなさい」とおぬかし。「PIN?」「そんなもの しらねえよ」それ以降なにをどうしても開かない。あらためて日常生活に深く食い込んでござると知ったが、どうにも手が打てない「PIN いつものじゃないの」「PIN それじゃ 0000 を入れたら」それからほぼ半月間、スマホ君が作動しない日々が続いた。

◎今度はPCを開けたがブルーの画面が変わらない。「えええ フリーズ」こんなことが同時にくるとは。調べると6年経っている、6年ではまだ寿命じゃないが2.3年前から作動がおかしい、「おかしいねえ」とぼやきながら使っていた。おかしくなると再起動などして動いていた。2年前にメモリを買って増設した。PCを始めたのは50歳になる前からだった。当時会社員の方々もデジタル化が進みだし、デスクにはそれぞれ一台ずつ置いてさわっていたが、ほとんどの方が業務連絡や業務日誌程度で、PCを使って作業をしているような専門職は少なかったんじゃないのかな。当時、PCを買うか、陶器の窯を買うか迷った末、MAXのモノを買った。お値段は100万円を超えていた。「これからの時代はね 美術も デジタルですよ」と勧められたが、今から考えたら進めてくれた人はデザイナー関連の人だった。

◎この日は、5つの事が一度に来た。来客がある。トヨタ車を豊中まで運ぶ。ホンダ車をと夜中までもらいに行

く。スマホがフリーズした。PCがフリーズしたが、初期化することで動き出したが、これが重大問題に発展。

057 一日 180725

◎今までの、最近のオレはデジタルのどっぷり浸かっている。スマホが作無しなくなり、「えらいこっちゃ 連絡がつかない」と思うが、これはたいした連絡じゃない。「いまだこいる?」「いまなにしている?」程度の連絡ばかりである。

そう簡単に言うてしまうが、「ちょいまって これがあった」スマホに入っている山の地図はおおいに重宝した。今まで山を歩きながら、「いま オレは どこにいる この地図の どこなんだ」地図を見ながらこの何処がわからなかったが、スマホのGPS機能が素晴らしく現在地を教えてくれる。現在地がわかると、「登山道から外れていないか あとどれくらいで 到着するか まだこんな所かよ」そういうことが素早くつかまえられる、これはありがたかったね。

山の地図は、ジオグラフィカという名のソフトで、何年か前にたった1000円で購入し、永続的に使えるらしい。とはいえ基本的な使いかたしか知らない、まったく極めていない、勉強しない悪い癖である。

山はね、有名で標高の高い山ほど標識や案内がしっかりしている。紙の地図を見ながら、その標識に沿って歩けば迷うことはない。大きな山で遭難するのは、天気の良い時に無理して登る人が多い。雨風の中では標識も見えない、雪でホワイトアウトは標識が雪に埋もれこれも見えない。こけたり、落ちたり、急な寒さに対応できなかつたりと死因は多い。

意外と怖いのが近所の低い山、里山なんて言われるが、里人が勝手に道を作って行き来するうちに道があっちゃこっちゃに繋がり、「え どこに行きゃ いいの」となる。低い山でも崖もあれば水の流れもある、しかも低い山ほど熊君もいる、怖いよお、である。

◎このぼやきの能書きとかおしゃべり、「知的じゃないねえ 感性のほとぼしりは程遠いね いつも 井戸端会議の やつらあ と 非難の目で 彼ら彼女らを見てるが 内容はそれらと変わらない 低俗だねえ」と気づくこの頃。

◎PCは日々開いてこの文章を書いている。「こんなもん 書かなくてもいいじゃない しょうむない」と言われれば一言もない。絵の写真も整理をしている。教えている方々の絵をPC画像で、「ああすればいいのでは ここはこうすれば」というようなことを言葉ではなく、ビジュアルで示している。このビジュアルという言葉、英語で: visual と書く、視覚的と載っている。他の方々は気軽に使っておられるが、オレは、画像、視覚、ということから、色の配分、色の面積、全体の構図と空間、と八方に広げ示していきたいので、最初の一文字は英語で、あとは日本語というわけにもいかない、絵、画像と日本語で表していきたいと思います。

◎50歳前後に最初のパソコンを買って以来付き合いは長い。最初のころは何もわからずに恐る恐るキーボードを押していたが、何度も画面が固まってしまった。「あちゃあ また フリーズ」ちょっとわかってくると、あっちゃをいらいこっちゃをいらい、時間をかけて復元していた。おかげで先日もPC君が、「初期化をすれば 起動が 可能かもしれません」なんておぬかしになり、「ならば」と思い切ってボタンを押した。四半世紀前には何度もやらされた作業を、ジジイの今ゆったり直していった。

パソコンの動作が、数字で動いている、ふたつの数字で、なんてことを聞いたような気がするが、このややこしい作業をボタンを押すだけで進められるとは、まさに産業革命だと思う。色は1万ぐらいあると聞く、音は何万個あるのかね。匂いとか、触覚とかの機能は聞かないね。AIという言葉が盛んに使われ、仲間の先生連中も盛んに利用しているとか聞くが、オレはまだ興味が無い。

PCがフリーズした、「え 寿命 買い替え」とたまげたときに、「これは 天が アナログに戻れ」とおっしゃっているのではと、敬虔に悟ったようなことを口にしたものである。PCのアレが使えない、コレがだめだとわ

かってからは、PCを開ける時間も短くなり、そのぶん描きかけの絵をまじまじ見たり、ちょっと色を入れてみるかと筆を動かしてみたり、そんな余計なことが、「え 楽しいじゃない」と思ったりもする。

058 木曾駒ヶ岳 230725

- ◎菅の台バスセンターに立っている、暑い。思い出した、ここには1.2度来ている、澤山グループで来ていた。もう20年以上も前のことなのかな、駒ヶ根ICから山側にすぐのところにある。ここでケーブルとバスの往復券を買ってくれた、5000円足らずでした。本日は山の会の方が7人と登る。宝剣山荘で4人が宿泊、オレを含め3人がテントである。20分ほどバスの待ち時間、3連休の最終日で続々と山から人が下りてくる、反対にこれから登る人は少ないので、駐車場もすんなり入れた、バスも順次乗れる。外気は相当暑い、信州と言っても大阪と変わりがない、容赦なく太陽が照りつける。バスの走行時間が30分かかる、ロープウェイは7分だそうだ。我々が歩くころには夕立が来る予報だが、この暑さ、「雨具は熱いな」なんて思っていた。
- ◎バスでは座席に座りザックを膝の上に乘せた。ロープウェイでは、少し混んでいる、谷すじのまわりの樹々を見ていた。千畳敷ホームの外に出ると目の前にカールが見え、神社のところから左右に登山道が登っていく。見始めたころにはまだ青空が少し残り緑の中に岩ゴロゴロの景色が見えた。10分もすると霧が出始め景色が見えなくなり、ぽつりぽつりと来た。「ややや 今のうちに カップを着込もう 途中じゃいやだ 今だ」ごそごそザックから雨具を出して着込んだ。知っている人は、「そらあ たいへん ズボンが 入らないよ」とこれは、登山靴を履いたままで雨具のズボンを無理やり突っ込むことはいかに大変かということ。
- ◎そんなことをしながら、「あれええ 身体が 疲れている こらあ おかしい」と感じた。暑気あたりか、眠気覚ましの覚醒用ドリンクが古かったのか、翌日も力がでぬままであった。そんなわけで、雨がザザ降るなか、たった30分強の登りがきつかった、「まだか どうなった くそおお」の登りが終わり乗越に立った時はほっとした。宝剣山荘小屋がすぐそこにあり、右に左に3000M級の岩の山がある、登ってきたと実感である。途中で黄色い花、ミヤマキンバエだそうで咲いている、それ以外にも所々に白や紫や小さい花が咲いている。先日ラジオの俳句の先生が、「はなばたけ おはなばたけ 違います」とおっしゃる。おはなばたけは夏の季語で、高山にある小さい花々の眺めのことだそうだ、この言葉を聞くと澤山さんを思い出す。
- ◎テント場は小屋の傍にある、すでに5張りがある。「どこがいい こっち あっち」場所探しに意見が別れ、4人用のテントが出てきた。寝るのは男2名と女1名だ。まだ新しい山テンで大きいのに2.4キロと軽くできている。すぐにテントが張れ、ザザブリで濡れた雨具を通路の杭に乾し、荷を出した。ザックカバーを忘れたのでシラフが少し濡れていた、ガスとコンロを出し調理を始めた。「まずは乾杯」ビールにワインにバーボンが出てきた。餃子を焼きましょう、ポテトサラダを食べましょう、アニーヒョを食べましょう、フライパンでいろいろなものが出てくる、美味いとほおぼりながら景色が夜になってくる。冷えてきた、ダウンの上着が欲しいというぐらいに寒くなってきた、長袖のシャツに薄いジャンパーを着込んだ。3000Mの高地は冷える。
- ◎朝、昨夜作って余ったスパゲッティをかき込みパンを齧り出発した。「あ 入眠剤を忘れた」「持ってるよ あげよう」2錠もらい昨夜はすぐに寝つけた。よく眠れ、アルコールも抜けたはずだが、まだ昨日のフラリが残っている、だるい。オレも歳で少しずつ弱ってきたのかな、山で、調子の悪いのは5月の九州以来だ。5時半に出発して千畳敷駅に向かう。そこでロッカーに荷を入れ、いよいよ三沢岳に向かう。
- ◎千畳敷のカールを横に見て石ころの階段を上っていく。昔、「カールだよ デブリだよ」なんて山言葉を澤山さんが使っていた。調べるとカールは雪がどンドン積もり凍り山のようになって地面を押しつけ、椀状にへこんだ地形だそうだ。デブリとは、雪崩がゴロゴロ落ちてきてゴロゴロ状態のことだそうだ。
- ◎ぐわんばれ、がんばれ、エンヤコラ、どっこいしょ、乗越に登り、三沢に向かった。歩きながら、おはなばたけを見つめるオレ、花は小さいよ その小さい花が石や岩の間から、白や黄やピンクとポツリぽつり見え隠れはいいもんだ、と思うこのごろ。

- ◎5:15 ケーブル駅を出発して登り始めた、すぐ上の乗越までである。30歳代のころ“身障者登山の会”というのに参加していて、ほえ籠のようなものを作り、1人を乗せ4人で担いで宝剣小屋の方に登ったことがある。担いでる方も乗ってる方も大笑いの氣勢を上げ弾けていた。「あいつの小便をさせると こっちが手を洗わなきゃ」「すまのお」両手がだらりと垂れている彼の話で、手を洗ったのは絵の具屋の奥山さんだった。
- ◎登りながらふと足元を見ると手のひらサイズのネズミが横たわっている。「あれれ ネズミじゃなくて ウサギだねえ」小さい灰色のウサギがまだ昇天したてで横たわっていた。すぐにどなたかが啜えて持って行くことでしょう。「これ エーデルワイス」「へええ あの有名な」少しグレーっぽい白い花、その横にまっ白の花、名も知らない花が咲いております。
- ◎同道のMさんが、「百名山が まだ」「悪沢岳が 遠い 5日間 かかる」とおっしゃる。オレも行ったことがない、百名山も興味がなかったが、最近の知り合いの方がた、「達成した 達成祝いが大変よ ホールイン と同じよ」と笑い話。調べると南アルプスの中、奥の方にあるらしい、後日ゆっくり見てみましょう。
- ◎前をひよこひよこ、「あれれ イワヒバリかな」東吉野の明神平で見たことがあるイワヒバリに似ている。逃げない、ひよこひよこ道案内をしてくれる。サントリー鳥図鑑で調べると、“カヤクグリ”と出てきた。これにまちがいないね。しばらく進むと、「お ライチョウ 待望のライチョウだ」足首にワカンというより幅広のテープ、赤と黄のテープが巻いてある。目が赤い？何かをついばんでいる、これも逃げない。前を見ると小ぶりなやつが1羽、その前にもう1羽、また前に2羽、4羽の子連れのライチョウだ。いうまでもなく真夏の今は茶色い姿である。この後、帰途にも1羽の大きいライチョウを見た。ライチョウはどんより曇り空で出てくるそうだが、雲があると天敵の猛禽類から見えにくいからさうだ。
- ◎もう少しだという所で一本取っていると、二人の方が追い抜かしていった。一人は60歳代のお父さん、もうひとり50歳代のお姉さん、こんなマイナーな山にも人が入ってくるんだねと思っていた。そのお姉さんは頂上で再会して少し話した。ソロでテント泊をしながらの山行らしい。「もう還暦を超えて」「それじゃ オレの ほぼ30下だよ」もう荷が重くてお金をかけて、ザック、テント、シラフを超軽量にして、食事も粗末にして登ってますとのこと。前カバンに400MMのレンズカメラと肩にゴープロをつけていた。
- ◎三沢岳は何度か上り下りして、クルリ巻いて頂上があった。横に大きな岩、平たく屋根のようになった岩が横たわっている、「あそこで 昼寝すると いいんです」と帰途のロープウェイで聞いたが、早く帰ろうと急いで歩きだした。なんだかばて気味である、来る途中の車の中の目覚ましで瓶が古かったのか、登りだす前からフラリが来ていた。テントで美味しいものを喰い、一杯いただき、入眠剤をいただきぐっすり眠れば元氣もりもりと思ったが、やはりばてている。ばてているとはいえ、テント場から千畳敷駅経由で三ノ沢まで行き、1時に駅まで帰ってきた。ほとんどコースタイムである。計算間違いで水も少なかった、Mさんに入眠剤と水をめぐんでいただいた、感謝である。ただ、いつものように食べない、これはおかしい、欲しくない、風呂で1キロやせていた、びっくりだねえ。
- ◎天気予報通りに昼をまわったところから山の上は曇り始めゴロゴロも聞こえだした。駅から、「急いでください 雷雲が近づくと ロープウェイが運航中止になります」とアナウンスが聞こえる。駅で皆さんと合流し臨時のロープウェイ、臨時のバスと真夏の平地に降りてきた。
- ◎帰りはザックのパンを齧り、水分を何本も飲み運転した。体調も良くなり、飯を食わないので眠くない快調である。「ガソリンを入れなくっちゃ」「針テラス まで もちませんか」「そんな・・・」乗るのが3回目のステップワゴン、ガソリンメーターを見ながら高速を走り続けた。目盛りが20ある、4になったらすぐに給油のマークが出た。あとはひやひやもので、「高速道路は ガソリンが 高いから」「そんなこと言って JAF 呼ぶのも格好が悪い」なんて言いながら、2回1000円給油した。こんな給油はジジイのすることではないねえ。
- ◎針で冷やし中華を食べ、7000円給油して帰路を急いだ。10時に家に着いた。